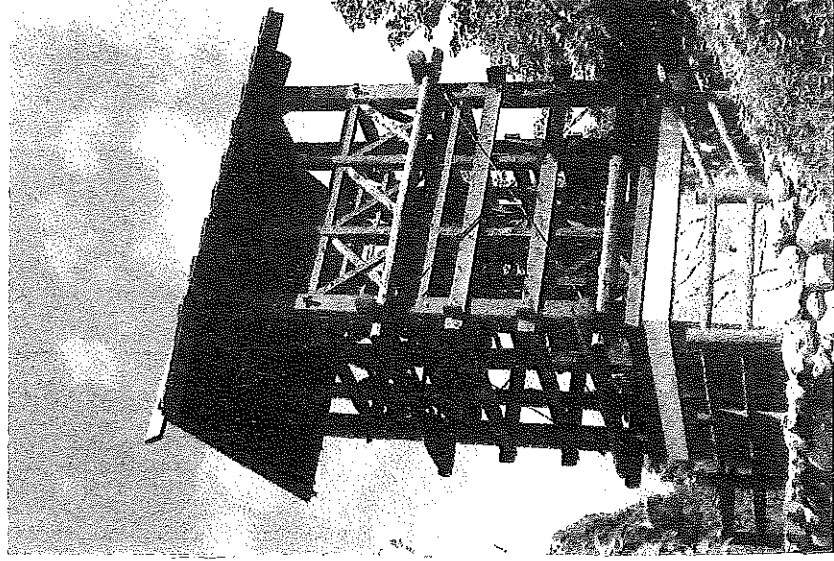


# 小斎歴史探訪

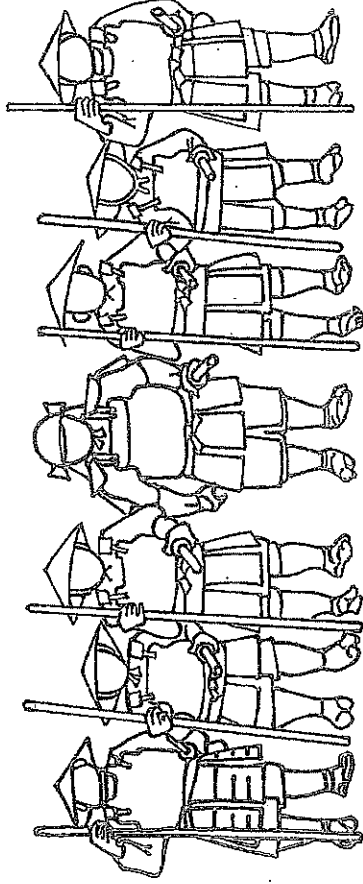
陣場山・物見やぐら  
・小斎城（柴小屋城）



小斎の新たな名所

物見ものみ槽どら

|| 小斎振興協議会 ||



小斎歴史伝承会・小斎振興協議会

## 次の文献は、物見櫓の前面に掲示しています。

ここは小斎城です。

皆さんの目の前に広がる伊具盆地を、阿武隈川が横切って流れています。

伊具は今から400年以上も昔、戦国時代の終わり頃、伊達と相馬が境界を争う

激戦を繰り広げたところです。

丸森町には、皆さんが立っているここ小斎城の他に、金山城・丸山城があります。

伊具郡争奪戦にそれぞれ重要な意味があった三つの城をご紹介します。

### 【戦の始まり】

伊具郡は最初、伊達領でした。息子の晴宗との戦に敗れた伊達植宗

は丸山城に隠居し、隣接する相馬領主で娘婿でもある相馬顕胤に支えられて

最晩年の18年を送りました。

永禄8年（1565）植宗が丸山城で亡くなると、相馬は一気に伊具郡を相馬領と

します。

### 【伊達による最初の伊具奪還戦】

植宗と戦った息子の晴宗から一代あと、植宗の孫にあたる輝宗の時代に伊具奪還の

戦いが始まります。皆さんの目の前が戦いの中心地です。

現在田んぼの中に見える人家周辺だけがしっかりした地面で、あとは馬も人も飲み

込む深田でした。細道や橋から落ちると、首を刈られるばかりです。

矢ノ目合戦と呼ばれる激闘は、相馬方が優勢、伊達が多く犠牲を出して撤退した

と、相馬の資料にあります。

## 【再度の伊具戦 政宗初陣】

天正9年（1581）伊達輝宗は満を持して再度伊具攻めに臨みます。

この戦は15歳の嫡子・伊達政宗の初陣でもありました。

又、おそらくこの地は、政宗の一歳年下の従兄弟、後に猛将として知られる伊達成実の初陣の地でもあります。

## 【伊達の楔 小斎城 標高約40メートル】

阿武隈川北岸には伊達方の角田城がありましたが、南岸には相馬方の小斎、丸山、金山の城とその間に沢山の陣があって伊達がつけ込む隙間はなかなかありませんでした。それが、天正9年（伊達側の資料では天正8年）小斎城主佐藤官内が相馬を裏切り、伊達方に付きます。

相馬内の権力争いで父親が憤死したところへ、伊達が内応の誘いをかけていたのです。小斎城が伊達についたことで、角田から阿武隈川を渡る橋頭堡が出来た事になります。以後、戦況は伊達有利に展開して行きます。伊達が相馬領伊具に打ち込んだ最初の楔が小斎城です。

## 【祖霊の城 丸山城 標高約50メートル】

丸山城は、今でも伊達祖霊の墓を抱いています。伊達、相馬双方共通の先祖であるばかりか、奥州の大家のほとんどが種宗の血を受けています。

英傑・種宗の墓を実子晴宗ではなく、娘婿・相馬顕胤とその子供らが守る状態は、伊達には不利です。丸山城奪還は、軍事的な要衝領土拡張といった面の他、祖霊奪還の要素があつたかもしれません。

丸山城がいつ伊達に落ちたのかは、正確にはわかりません。戦いが和議によって  
終結する。天正12年(1584)には伊達のものとして確定します。

## 【不落の城 金山城 標高約120メートル】

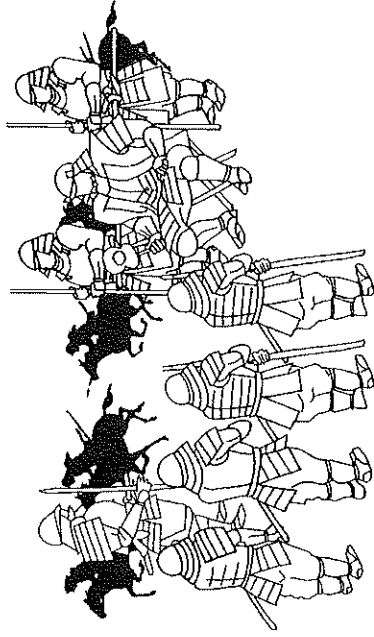
三つの中で一番高く、規模も大きい金山城は、檀宗没後に相馬が伊具に築いた城で  
す。現在でも城の遺構がよく保たれています。

相馬方資料によれば、金山が難攻であることを見た伊達家臣遠藤基信が、金山を  
直接攻撃する代わりに、相馬本領との連絡を絶って弱らせることを提案したとさ

れます。伊達側には、細かな攻防の資料はありませんが、金山城の最後は天正12  
年の伊達・相馬の和議の中で伊達方に引き渡されます。この時伊達のものとなった  
金山城は、以後相馬に対して難攻不落の城であり続けました。江戸時代に入ると

金山要害と名を変え、明治になると、不落のままにその役目を終えました。

文献「独眼竜政宗」作者・千葉真弓氏 平成25年10月・作



## ■戦国時代の小斎

ここは相馬に近い仙台藩の小斎城である。仙台から南へ約十里、阿武隈川を挟んで周囲を丘に囲まれた小さな村である。近隣には角田、丸森、金山に城があり、それぞれに領主がいた。

今から450年ほど前、小斎は伊達家の領地で、小斎平太兵衛（八替七郎兵衛）と言う人が城代として西館城（小斎城）を守っていた。

この城は清水上にある上館城の西にあるので西館城と呼ばれていたものと思われる。

小斎平太兵衛は、八替七郎兵衛と言う仇名で呼ばれていた。八度まで心替りをしたので相馬では《八替八替》と呼び本名を呼ぶ者が無かったと言う。

世は戦国時代の末期で、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康などの戦国武将達が戦いに明け暮れていた頃である。

小斎平太兵衛は、永禄9年（1566）相馬家の家臣・新地の谷地小屋城代、藤橋紀伊胤泰に招待され、酒をご馳走になり、寝てしまったところを殺される。

小高城にいた相馬盛胤に、早打ちで知らされ合戦となり、伊達家の領地であった小斎は、相馬に取られたのであった。相馬では、藤橋紀伊胤泰を小斎城代として西館城を守らせた。

その頃は、金山や丸森は、伊達家の領分であったが、小斎城が攻め落とされたことで、相馬の軍勢が攻め寄せついに敗北した。

そして藤橋紀伊胤泰を金山の城代に移し、小斎には、佐藤為信（好信の子・小斎佐藤家の初代）を城代とした。

亙理の亙理元宗は、米沢の伊達輝宗に使者を送り、相馬が伊達家の領分である小斎、金山、

丸森などを次々に攻め取っているのです、この際、是非ご出馬あれと訴えた。

伊達輝宗が小斎の矢ノ目に到着したのは、天正4年(1576)7月9日であった。

## ■小斎における伊達と相馬の戦い

佐藤宮内の先祖は、もともと関東の武士であり、義経に従って平家と戦う。

何代かして戦国武将・岩城重隆(福島県いわき市)の家臣となる。

天文年間、岩城重隆が隣国の相馬頭胤と戦って敗れ、佐藤一族は相馬家に帰属する。佐藤家の棟梁は伊勢と言い、伊達家との戦鬪で武勲をあげる。

その後、為信の時代に伊達家の出城、伊具郡小斎城を奪い、相馬家の領地とした。為信は小斎城代を命ぜられる。人事への不満が強くあった。磯部から小斎への異動の降格人事である。佐藤家は250ほどの所帯であった。佐藤為信は一大決心をする。家中ごと伊達に寝返る大作戦である。

伊達家は政宗の父輝宗の時代であった。為信は輝宗に賭けた。御目付け役として桑折主馬之介、金沢美濃の兵100人余りが小斎城に来るのを知った為信は、彼らを皆殺しにして伊達についた。命がけの反乱だった。

『相馬家より金沢美濃を番頭として、桑折左馬之介、同小一郎を始め加番の侍が、足軽100人を連れてやって来た。金沢美濃は為信の縁者であった。斎藤軍太美作、鈴木外記等に斬りつけられ討死した。金沢美濃は後に金沢明神として、討死した場所に祭られている。佐藤家では金沢明神のたたりで、最初に生まれた子は良く育たないと言う話しが伝わっていて、後藤を名乗らせたり、神様の子のとり子にしたり、したそうだ。金沢明神の北の山

には美作明神がある。これは金沢美濃を斬った斎藤美作を祭ったものである。斎藤家の守り神。『佐藤為信（宮内）は、永禄9年（1566）に小斎の城代になり、その後ずっと小斎に住んでいたが、父の好信が死んで、はや3年目を迎えていた。天正9年4月11日、父の仇、相馬の重臣・桑折左馬之介を小斎で討ち果たした。そして、家臣一同を引き連れ

て小斎の城ごと、伊達家の家来になりたいと願い出たのである』

佐藤家の人々は岩城氏～相馬氏～伊達氏と主君を替えてきた。やがて伊達政宗の時代にな

り、相馬家とは日常的に戦闘を繰り返して、伊達政宗の戦場にはいつも小斎勢の姿があった。

天正11年の始め、田村清頭（伊達政宗の正室愛姫の父）等の仲立ちで伊達と相馬は和睦した。そして天正11年5月に丸森を返し、翌年に金山を返した。

翌12年に政宗は18歳で家督を相続した。その節、為信は伊達政宗から小斎村一宇百貫文（1千石）を拝領した。その上、大功あるを以て御一族に列せられ、引両三端頭の紋を下しおかれた。

## ■柴小屋城… [小斎城]

佐藤為信は、西館の周辺を仔細に検討した結果、もっと高い場所に、更に堅固な城をつくる必要があると考えて、西館城の東に新しく柴小屋城をつくったのである。

柴小屋城本丸跡の高さは、73.4mで、現在は「お天王さま」と呼ばれている八重垣神社が祭られてあり、柴小屋城の碑が建っている。

仙台領古城書立之覚には、柴小屋城は東西29間、南北15間で面積は435坪と書かれている。

柴小屋城しばこやじょうが出来上がり、もとの西館城跡も当然利用したので、小斎城は実に大きく堅固けんこな山城やましろとなった。高い小斎城から見下ろせば、矢ノ目の陣じんは丸見えで、伊達軍勢くんでいの動きがよく分かったと思われる。

『佐藤家の家臣』 『佐藤家御預給主の家臣』

家中	112名	家中	6名
足軽	95名	合計	6名
百姓	10名	※給料をもらっている者は全て家臣である。	
寺院	5名		
その他	3名		
合計	225名		

佐藤家旧屋敷は柴小屋城西南の中腹に四代目までの佐藤家の屋敷があった。五代目（易信）以降は、南側に屋敷を移した。

■ 藤原姓佐藤家系譜

公清……後冷泉帝天喜元年3月（西暦1053年平安時代）

北陸道佐渡、越後の州さつしの刷史さつしとなり赴任しゆじんして佐州さしゅうにおり、佐渡さどの守かみを兼ねる。

佐渡さどの佐さと藤原ふじわらの藤ふじをとって佐藤氏さとうとなる。

【初代】…佐藤為信ためのぶ 右衛門うゑもん 宮内くない 紀伊きい

父の跡を継いで相馬家そうまけに仕えた。永祿年間えいろくに相馬盛胤そうまもりたねは兵を率いて伊達家いだてに属ましていた。

伊具郡小斎いぐぐんしゅうの邑主ゆうしゅ小斎平太兵衛へいたべいを撃つて、その地を掠め取り為信ためのぶに小斎城こさいじょうを守らせた。

天正9年4月（1581）為信ためのぶは小斎城こさいじょう代を命ぜられ、桑折左馬之介さおりさまのすけ、金澤美濃かなざわみのは軽率けいそつ

100人を率いて加番かばんとして小斎城こさいじょうを守るように命じられた。

同11日、夜に乘じて為信兵ためのぶへいを起こし、自ら剣けんをふるい桑折さおり並びに軽率けいそつ5人を斬った。



為信の家人も亦善戦して金澤及び徒兵若千を撃ち残率はみな相馬に逃げ去った。

為信は伊達輝宗に属し小斎村1千石を賜り大功あるを以て一族に列し、引阿三端頭の紋を授けられた。

天正19年6月24日(1591)伊達政宗が栗原郡左沼城を攻めた時に戦死した。

年は60歳で没、法名は正円実法で覚禅院と号した(覚禅院殿 正円実法 居士)

金山の中島宗求を始め伊達成実・片倉小十郎景綱(大森城)

輝宗の叔父で亘理城主 亘理元宗(晴宗)

政宗の叔父で留守六郎政景(輝宗)…所領は岩切、高砂、多賀城、塩竈、利府、七ヶ浜  
松島など

約24,700名の兵士の集結となる。



【二代目】…佐藤勝信 右衛門 紀伊 年は66歳で没

佐藤勝信は大坂夏の陣に出陣した。

天正18年5月、伊達政宗が相馬と駒ヶ嶺の戦いに於いて、真っ先に進んで傷を受けた。

同19年6月、栗原郡左沼城の戦いに於いて父為信が戦死したのをみて勝信も大いに戦い  
敢えて討死しようとした。

伊達政宗は勝信を召して勇敢な戦い振りを賞して彦四郎と言う佩刀を賜り、命を全し  
て戦功をあげるよう諭した。

小斎佐藤家の初代為信と2代目勝信の墓は小斎には見当たらない。

為信は栗原郡左沼の清川の畑の中に埋葬された。

為信が愛用していた。鎧と兜と佩刀は小斎に勝信が持ち帰り、鹿島神社に納められた。

- 【3代目】…佐藤実信 甚三郎 南斎 年は88歳で没  
 【4代目】…佐藤清信 新次郎 年は39歳で没 病死  
 【5代目】…佐藤易信 右衛門 伊勢 主膳 年は74歳で没  
 【6代目】…佐藤因信 甚三郎 主殿 伊賀 宮内 年は83歳で没  
 【7代目】…佐藤為信は仙台藩若年寄、江戸留守役として江戸に在勤。  
 【8代目】…佐藤本信 新三郎  
 【9代目】…佐藤道信 元文4年6月19日に早死した。年は8歳  
 【10代目】…佐藤助信は江戸に在勤、仙台に戻って奉行職、家老である。  
 「仙台藩にあって小斎の佐藤家は外様であった。」  
 【11代目】…春信 享年80有一

【12代目】…佐藤<sup>うじのぶ</sup>氏信は江戸に勤務し、評定役、若年寄を努めた。

以下省略

【16代目】…佐藤<sup>まきお</sup>方亀夫 …姉が窪田家（久保田？）に嫁ぐ

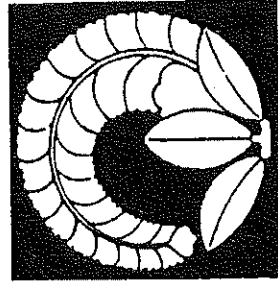
【17代目】…現在17代目 仙台在住

以下省略

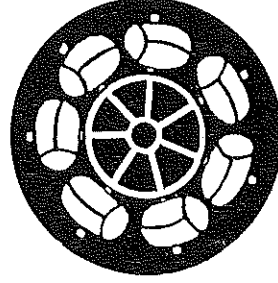
明治維新以前の約300年間の小斎村は佐藤家の所領地が大部分で

「石なし、下戸なし、百姓なし」と言われた様に殆どの人が武士であり、武士としての勤めを果たしながら米や野菜を作っていたのである。

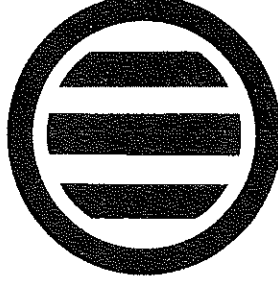
三



二



一



佐藤家の三つの家紋

左 巻一藤

水車（七つひしゃく）

引両三端頭（縦三つ引両）

## 【矢ノ目合戦と冥加山】(1)

天文・永祿の頃から相馬盛胤はしばしば本拠地の小高から阿武隈山地を越えて信夫郡・伊達郡に侵攻し更に亘理郡・伊具郡にも侵略して伊達家をおびやかした。

米沢に居城していた伊達輝宗は伊達領に進出する相馬勢を牽制すると共に伊具郡から相馬氏の勢力を駆逐して旧領を奪回すべく天正4年(1576)4月宇多郡に出陣し、その後、本陣を伊具郡小斎の矢ノ目に移して陣を布いた。

この時の伊達方の軍兵は伊達・信夫・伊具・刘田・柴田・名取郡から召集した將兵で17備えであったと言う。17備と言うのはどの程度の兵力なのか良く分からないが、一備には弓・鉄砲・鎗隊がいて騎馬武者が中核になってかなりの人数で編成されていたものだろうと思われる。

この中には後年金山の領主となる中島宗忠・宗求父子も参陣して12番備に属していた。勿論この時は金山の領主になるうとも、なれるとも、考えてはいなかっただろうが、伊達郡保原から来ていた。

これだけの軍勢を集めて布陣したのだから何等かの動きがあったはずだが「伊達治家記録」には「御働きノ様子不伝」となっていてこの間の事は何も書いてない。8月になって備頭の武將達から諸軍一致して奉公すると言う連判誓詞を出させた事が記録にあるだけである。

4月に出陣してから8月までの間、さしたる動きもなく何百、何千の將卒が兵糧を食いつ潰しながらただじつと睨み合っ居たと言うのは妙なことであるが、実はこの間に幾度か合戦あり、この内に伊達方が大敗北した戦いがあったのである。伊達方では伏せている

が、相馬方の「奥相茶話記」・「東奥中村記」などを見ると相馬方が大勝利を得た事が記されている。我が方の勝利を誇大に宣伝し、敗北を過少に評価したり隠したりするのは常であり、大東亜戦争末期の「大本營発表」みたいな事もあるので、相馬方の記録だけを全面的に受け入れるのは適當ではないと思うが、冥加山と言う名の由来に関する「矢ノ目合戦」についての話しから始めたいと思います。

発端は小斎の城の堀切普請から始まる。小斎の城は西の方から山伝いに登って来られる形なので、途中で咀根を掘切らなければ伊達勢を防ぎ止める事は難しいと言う事になり、小斎城の堀切普請をする事になった。しかし、矢ノ目に布陣している伊達方から丸見えの所で普請をするので、必ず妨害に出て来るであろう、その時は伏兵を置いて撃退するとか、

人夫は城中に逃げ込むとか、色々と手筈を整え普請にとりかかった。

案の定、伊達勢が押出して来たが命令系統が不十分だったのか、駆引の命令が徹底していなかったのか、左右左往しているうちに虚を突かれ、慌てて引揚げに掛かった。指揮者もなく各々の気持ちで引き始まったので騒ぎが大きくなり大混雑となった。来るときは山崎りの道を順よく出て来たが退却に掛かると気も、そぞろとなって、もと来た道ばかりでなく近道を選んで我先にと引揚げたので、いずれの道も人馬で混雑し泥田に乗入れて自由失ったり、踏み外したり、馬を堀に落としたり、ともに行き悩んでいた。

## 【矢ノ目合戦と冥加山】(2)

小斎城の堀切普請妨害に出た伊達勢が引揚げに掛かった際、不手際から大混雑となったのを見た相馬義胤はこれこそ絶好の機会、追討ちを掛けよと命令して一度に突を入れたの

で、伊達勢は益々狼狽して道を踏み外し、馬を堀に落したり泥田に乗入れて自由を失ったりして大混乱に陥った。これを小斎の城から見ていた相馬の将兵は、この時とばかり打って出て散々に攻め立てたので伊達方は大敗北を喫する事になってしまった。乱れた大軍を立直すのは難しいと言われている。まして指揮する者のない軍勢では手の施し様もなかつたのである。

これが、相馬方が末代まで語り伝える真加山の大勝利であり、伊達方からすれば前後不覚の大敗北となった矢ノ目の戦いである。

相馬氏家譜には「伊達の25備を義胤が押し崩し、騎兵250余り騎歩卒共に731人討ち取り大利を得、比合戦義胤絶代の勇敢也」奥中村記には「比真加山御利運は天正4年7月17日の事也」とある。

相馬義胤は、この山は神仏の加護により相馬の武運を開き、真加の至る山なので真加山と名付けたとある。真加とは「真々のうちに神仏の加護のある事」である。

本来この山はなんと呼んでいた山なのか分からない、伊達方では妙香山と書いている。南伊手に明光沢と言う地名があるので元もとはミョウコウ山とか言っていたのではないかと思う。ミョウコウ山の音を漢字に当てて妙賀山・妙号山・名号山・明護山等と色々書かれているが現在は「真護山」と呼ばれて館跡保勝会が維持管理している。なお安永の「風土記御用書出」には真加山と書いてある。

「真護山」は相馬方の本陣サイカチ澤（大内のサイカチ澤から陣林）から小斎城、また金山城・丸山城（丸森城）へとつながる中間の伝城で重要な拠点であった。後年、小斎の城主佐藤宮内が伊達方についた為「真護山」は伊達方に押さえられ、金山城・丸山城

(丸森城)は背後から脅かされて自滅する様に落城する事になったのである。

8月に伊達方では備頭の武将達から諸軍一致して奉公すると言う連判誓詞を出させた事は前述したが、これは7月17日の矢ノ目敗戦で浮き足立った諸將の引き締めを図ったものであるかと思われる。

諸郡から集められた将卒の中には、伊達方の威力に押されて仕方なく参陣した者もいたろうし義理で嫌々ながら来た者も居たに相違ない、また、気心も知れない武将達が隣り合って宿営しているのでもいつ敵方に寝返って裏切りに遭うかも知れないと言う疑心に駆られ戦々恐々とした陣営の空気が感じられる。

翌日盛大に首実検の儀式を行ったと記している。今も「首壇」と言われる場所が残っている。



## 伊達軍前後不覚の大敗北 【矢ノ目の合戦】……泥濘戦

伊達氏が天文の大乱で家中が動揺し、家督を継いだ晴宗が本拠を桑折西山城から米沢城に多した事により、仙道通りの軍事力が手薄になった。

この機を逃さず相馬氏が伊具郡に進出して、伊達氏の丸森・金山などの諸城を落とす、隈東の地を相馬氏の勢力下に置いた。

その為、伊達輝宗がその奪還を図り伊具郡に出陣して戦った。

矢ノ目の合戦はその中の一つである。伊具郡を勢力下に置いた相馬氏は本陣を金山城に置き、小斎城を前線基地とした。

それに対し、伊具郡に出陣した伊達氏は矢ノ目に本陣を置き、小斎・丸森往還封鎖にかか



ると同時にそみねさき 祖峰崎より小齋城に取り付いて攻略にかかった。

発端は小齋城の堀切普請から始まる。小齋の城は西の方から山伝いに登ってこられる地形

なので、途中で粗根を堀切らなければ伊達勢を防ぎ止める事は難しいと言う事になった。

これを見た相馬盛胤は小齋城代の泉大膳に命じて、そみねさき 祖峰崎の堀切普請にかからせ、伊達

軍の出動状況を勸案して、ながね 小齋城として金山長根方面にそれぞれ逃走する手筈を整え

て工事を始めた。

これを見た伊達軍は軍勢を繰り出し、矢ノ目の陣から長根の間の一本道を一列縦隊にな

る形で金山に向けて追撃した。伊達軍は大勢の相馬兵や普請の人足を追い散らし、一応の

戦果を収めたと見えたが、しかし、予め伏せていた相馬軍の伏兵が現れ、一列に隊列を

組んでいた伊達軍の進路と退路を遮断した。

その為、身動きが取れなくなった伊達軍は退路を相馬軍の包囲陣のうち原野の中の細道を  
選び、矢ノ目の本拠を目標し退却し始めた。

しかし、その細道の先にあったのは大泥地の声原で、伊達軍は次々と後続の隊に押され、  
泥沼の中に沈んでいった。

身軽な歩卒は小道を取って逃げたが、馬上武者は殆ど泥沼の中で討ち取られた。

この時、伊達軍では、名だたる諸将が戦死し、首級の数は730級であった。それに比べ、

相馬軍の死者は歩卒30人ほどと軽微であった。

矢ノ目合戦は戦国の合戦としては珍しい泥濘戦で、この戦いに敗れた伊達輝宗は、麾下諸

将に大動員をかけ、連判誓詞を行わせたが、伊具郡の戦線はしばらく大きな変化はなかつ

た。

伊達・相馬両軍が存亡を懸け、熾烈な争奪戦が始まるのは輝宗の嫡子伊達政宗が成長し、前線に姿を見せる天正9年頃からである。

## 【首壇と首実検】

矢ノ目の戦いで大勝利を得た相馬義胤は翌日首実検を行ったところ、1,480余級あったと「奥相茶話記」に記されている。当初、騎兵250余騎歩卒731人討ち取りとあるが、「此外深藪にて見落とし夜中にて取り落とし水底にて取りかねたりし首何程と言う事を知らず」「士民共兵具を取らんとて大勢出て尋ねけるに敵の死骸此処其処より見付けて訴えける程に昼沾の首着到1,480余級なり」とある。多少誇張はあるかも知れないが割引して考えても大勝利だった事には間違いない。

相手を殺していかにかに自分が生残るか、いかに値打ちのある首を取って恩賞にあずかるか、と言う事が戦場に於ける侍の考え方だったと思う。首はそれらの働きを証明する為の証拠品だったのである。また、値打ちのある首を取って恩賞にあずかるのが侍の働きと司じように、戦場に捨てられた兵具を取り、死骸から金目のもの剥ぎ取って歩く士民も戦場での稼ぎだったのである。いかに美化しても戦場は陰惨なものだった。

どこの戦場でも首実検の儀式が行われたとは思われないが、この時の場所は小森の大槻明神から南の方に5・6丁入った山であったと云う。

この山の斜面を三段に切り崩して土壇を設け、上段には大將首一つ、二段目には城主首五つ一通り置いて三段目にも名のある者と思われる首を40程並べ、その他の首は段の両側に向かい合わせに積み重ねて置いたとある。(大將・重臣級の首は一つ一つ丁寧に)



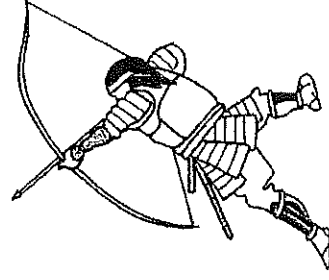
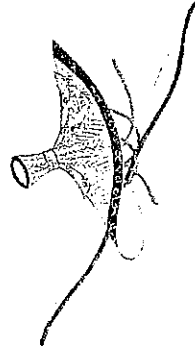
洗われ、髪も梳かれて「首化粧」が施され、板で作った台に載せられて首実検に供されるものである。雑兵の首は一纏めに纏められるだけであった。）

儀式は、諸士が着座し、次に盛胤・義胤の両将が床机に腰掛け、太刀に手を掛けて首を実検すると、この時総勢が一同に勝鬨を三度上げる。そして軍師が太刀を抜いて上段の大将首にかざし、以下段々に同じ所作をしてから鞘に納め儀式が終わるとなっている。

首実検と言うものには色々な作法があった様だが、詰まりは勝利を誇示して味方の戦意を高めさせると共に、敵の士気を喪失させると言う考えがあったのであり、それに怨霊とかの祟りを恐れて鎮魂の供養も併せて行う儀式だったと思われる。戦死者の首は遺族が「首乞い」に来た時は戦死の状況を話して遺族に渡してやったと書かれている。

しかし何時の場合でもそうだった訳ではない。天正17年5月21日伊達政宗が宇田郡新地囊頭山へ攻め懸かり数多の首を取り、多くの者を生け捕りにした際、相馬方より討ち死にした者首懸望として出家行人等が来たが絡め捕って鉄砲的に掛けて撃たせたり、政宗自身が斬殺したりしている。首乞に来る僧侶・行人の中には俄かに剃髪して僧形となって偵察に来る者もあり。大将に近づいて討取らんとする刺客がいるので怪しい者は即座に殺した様である。首を送り返すなどと言う事は美談ではあるがざらにある話ではない。相馬方はその事を言いたかったのかも知れない。

この首実検をしたと云われる所が今でも首壇と呼ばれているが、今は開発が進んでその痕跡もない。



## や の め やかた 【矢ノ目の館】

がいよう あぶくまさんち ほんち ぼんち  
概要・阿武隈山地から伊具盆地に、流れ出した阿武隈川は、原町川岸あたりで河道は、  
北に向きを変えて流れており、その下流丸森町小齋の右岸沿いに連なる、自然堤防上に矢  
ノ目館は所在する。東側は自然堤防の後の後背湿地をなしており、南側には東側の阿武隈  
山地から流れだした。小齋川がこの館の南西部で、阿武隈川に落ち合っている。

ごじょうしよたち や の め やかた どうざい けん けん けん けん  
仙台藩『古城書立之覚』によれば、矢ノ目館は東西13間、南北15間、195坪とあり、

しょうきぼ やかた ほんぞん ほんくわおあと ほんくわおあと  
小規模な館とされているが、現存する本郭跡をみても、一辺が約百メートルの方形館と

いこう しゅうへん やかた いこう ほんじょう ずいでんか やかたあと  
して、遺構が残されており、周辺の館遺構は昭和の圍場整備により、水田化されて館跡

けいかん ちせきず ちせきず りやくず さくせい りやくず  
景観は失われたが、旧小齋村の地籍図により矢ノ目館の略図が作成された。この略図によ

や の め やかた けんよう ぶくほりよくかく へいち やかた りんかくしき けいじよう  
って矢ノ目館を検討すれば、複雑複郭式の方形平地館で輪郭式の形状をとり、一辺が約

200メートルと大規模なもので、さらに北郭が付随していた。

ほんくわ みずほり すいでん どうい ざんぞん ざんぞん  
本郭は水濠の水田面より一段高く、土塁は南側にかけて残存しているが、かつては郭全

域に巡らされていた。南東の隅は土壇状に高く物見台跡とみられる。

おおてみち ひがしがわ みずほり どぼし ほりぞ くるわ  
大手道は東側の水濠を土橋で渡り、濠沿いに南に進む道の西側には、郭の内部が見通さ

れないように、鬚しの土塁と物見台との間を、西側に桁形に折れて本郭に通しており、こ

こに本郭大手の虎口が構えられた。横矢掛けの構造を持つ戦国期の城である。この本

館跡は天野・清水家の宅地と畑地となっており、天保5年（1834）の『小齋邑主佐藤

家人頭併録高調』にも、同様の記載がある。

そとくるわ ちつづき ほん  
外郭は南・西・北側は地続になっているが、北東から東側に掛けては、濠堀で二の郭に



# 小斎城案内看板 ▼

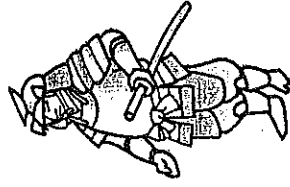
## 【美作明神】(みまさかみよしん)

『齋藤軍太美作守を祀った祠である』

天正九年(一五八一)四月十一日

佐藤為信が金澤美濃を討った時、助力をしたと伝えられている。

齋藤軍太美作守は、中世から小斎の郷土として活躍し、柿内田齋藤家の守り神としてこの地に祀っている。



-1-

## 【古鋳窯跡】(ふるだてかまあと)

平安時代(七九四〜一一九二)

九世紀頃の半地下式の窯跡で須恵器と言われる硬い焼き物を生産していた。

須恵器はねずみ色をした椀・瓶・壺などの形があり、当時の生活用品とされていた。

山の斜面を利用し炭窯のような造りで専門の職人が造っていたと考えられている。

-2-

## 【金澤明神】(かなざわみよしん)

『相馬藩家臣 金澤美濃を祀った祠である』

天正九年(一五八一)四月十一日

相馬藩は小斎城の城番の交代として金澤美濃を派遣した。

相馬藩にかねてから怨念をもっていた城代の佐藤為信とその家臣によって美濃は為信の縁者であったが、美濃をやむを得ず討ち取った。

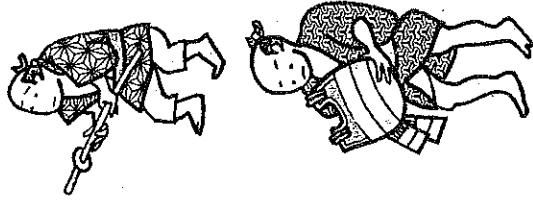
金澤美濃の霊を弔うため、金澤明神として祀っている。

-3-

## 【本郎道】(もくろどう)

『昔は朱雀口と呼ばれ、殿様が通  
る道とも言われた。又、練兵場や  
的場に行く道とも言われた』

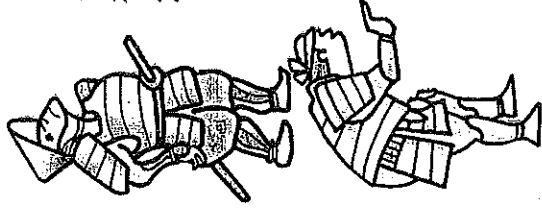
本郎道の先には佐藤家三代実信  
四代清信、五代易信に仕えた家老  
中山雅之助清勝 一族の墓がある。



-4-

## 【西館城跡】(にしだてじょうあと)

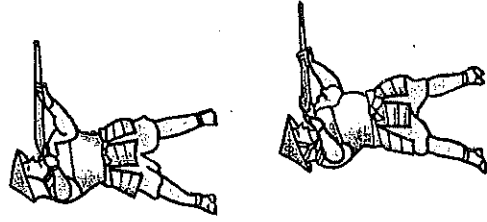
中世からあつた山城で、  
永正十二年(一五二五)頃、小斎昌  
の領主小斎山城助、長門守、平太兵  
衛などの居城であつた。  
永禄九年(一五六六)八替七郎兵衛  
とも言われた小斎平太兵衛が相馬藩  
の家臣藤橋紀伊胤泰に滅ぼされ小斎  
邑は相馬領となつた。



-5-

## 【土塁跡】(どるいあと)

土を盛り上げ、つき固めて築いた  
防護壁で土手状につらなっている。  
昔ともなつていたので、敵が攻めて  
来た際には、ここから鉄砲や弓矢で  
応戦した。  
城郭をとりかこむように築かれてい  
る。



-6-

## 【空壕跡】（からほり）

『地を掘って切り通した水のない堀』

伊達側から攻め込まれにくくするため、相馬側が造った空壕である。

天正四年（一五七六）伊達晴宗・

伊達輝宗父子が矢ノ目に本陣を置き、小斎城攻略にかかった。

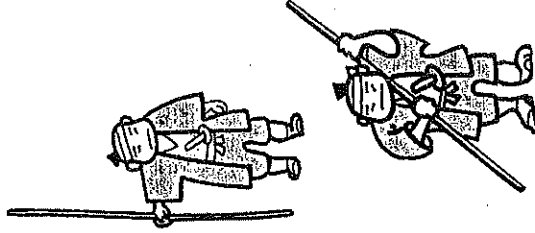
伊達勢を防ぐ事は難しいと言う事になり、天正四年七月十七日、相馬藩主相馬盛胤は佐藤為信、泉大膳を番頭として堀切普請を行った。

-7-

## 【搦手門】（からめてもん）

城の裏門のことで、二ノ丸に入る際は必ずこの門を通ることになっている。

この搦手門からは、有事の際に清水沢へ通じる間道（わき道・ぬけ道）もある。



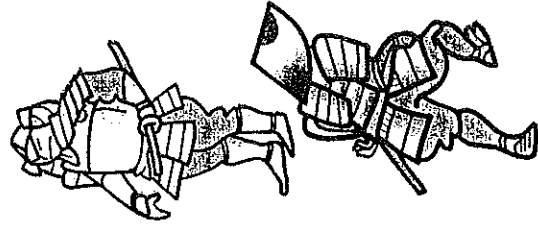
-8-

## 【二ノ丸跡】（にのまるあと）

『本丸に対してその外側の郭のこと』

東西約八十メートルの平場があり、搦手門や陸橋が設けられていた。

東西には空壕、南北には断崖があり、容易には攻め込まれない造りになっていた。



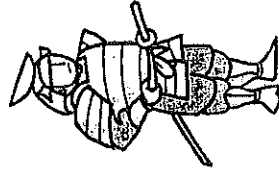
-9-

## 【陸橋跡】 (りつきょうあと)

『本丸と二ノ丸を結ぶ架け橋のこと』

普段は橋が架けられていて、自由に家臣が行き来出来るようになっていた。

しかし、敵が攻めて来た際にはいつでも外せるようになっており空壕があるため、戦いの時には重要な役割を果たした。



-10-

## 【大手門跡】 (おおてもんあと)

『本丸に入る所の城の正門』

(結びの御門)

結びの御門とは、本丸と二ノ丸に架けられた陸橋を一度くぐり抜け、次第に登りながら一回りして搦手門を通り陸橋を渡って大手門に至る。使者を案内して行くうちに偽者と見破った案内役の侍がその者を斬り捨てて橋の上から墮落したと言う話が伝わっている。

-11-

## 【八重垣神社】 (やえがき)

地元では「お天王さん・牛頭天王宮」と呼ばれている。八重垣神社と改称されたのは明治初年である。

柴小屋城本丸跡に祀られており、本殿は六尺四面、拝殿は六坪、境内の広さは約四百六十坪である。

昭和三十八年に愛宕神社(鷹)と合祀した。

祭神は素戔嗚尊で祭日は旧暦の六月十五日である。



牛頭天王宮

-12-

## 【本丸跡】（ほんまるあと）

天正四年（一五七六）頃、相馬藩主の命により、平場や空壕などを整備した。

後に、小斎佐藤家初代為信（宮内）二代勝信の居城となった。

本丸跡の高さは七三・四メートルで東西二十九間、南北十五間、面積は四百三十五坪である。

柴小屋城、西館城を含んだ小斎城は大きく堅固な山城であった。

元和元年（一六一五）徳川幕府の「一国一城令」により廃城となった。

- 13 -

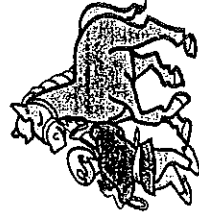
## 【馬屋跡】（うまやあと）

『面積は約八四三平方メートル』

二十頭程の馬を飼育できる馬小屋だった。

馬屋と三ノ丸の間に空壕があり陸橋が架けられていた。

馬に乗ったまま陣場山に登り遊仙寺の西側へ出る馬の通る道があったとされている。



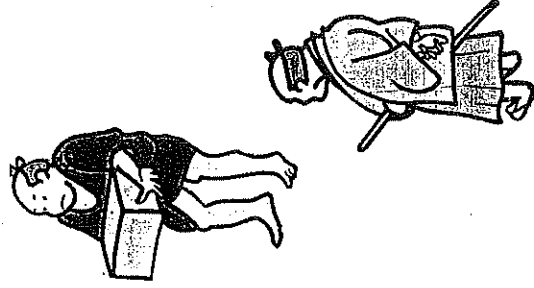
- 14 -

## 【佐藤家旧住居跡】

『小斎城主佐藤家の屋敷跡』

四代清信までは柴小屋城西南の中腹にあつたが五代易信の時にこの場所に移った。

代々佐藤家が居住していたがその後解体された。



- 15 -



流鏑馬とは奈良時代以前に5月5日の節句の日に宮中で行われた。宴会の際に武徳殿前の馬場で近衛と兵衛の官人達に試練された騎射の様式で武士達が継承したもので、馬を走らせながら馬上よりの矢を射る武技である。

馬上で矢継ぎ早に射る練習として、馳せながら鏑矢の的を射る射技である。

的は方板を串に挿んで3所に立て一人おのおの3的を射る平安末期から鎌倉

時代に武士の間で盛行した。現在は、神社などで儀式として奉行されている。

### 鹿島神社と奉射祭（流鏑馬）

小斎の鹿島神社に於いて、佐藤家が初めて奉射祭（流鏑馬）を行ったのは、佐藤家四代清信の時代の寛永20年（1664）であると明治10年改めの鹿島神社祭礼式記に書かれている。小斎ではこの神事を流鏑馬と呼んでいるが、佐藤家文書並びに鹿島神社の文書（明治以降）には奉射又は奉射祭と書かれている。

※為信（初代）・勝信（二代）・実信（三代）・清信（四代）・易信（五代）～

【鹿島神社…由来】…貞観八年（866）には小斎に鹿島神社が祭られていた！

鹿島神社に関する古文書で小斎に残る最も古いものは、小斎清水の齋藤軍太氏宅にある齋藤家の系譜である。

齋藤家31代 家仲のところに次のように書かれている。

家仲 齋藤軍太左衛門 小斎齋藤家7代目 当代柿内田初代

西館城主小斎長門守の家老となる。

天文元年（1533）故ありて鹿島明神を再建立す。宮材木は残らず

軍太左衛門が寄進す。これ守護神を鎮めるに当たるなり。美作守に任ず。

天文廿二年九月廿四日卒

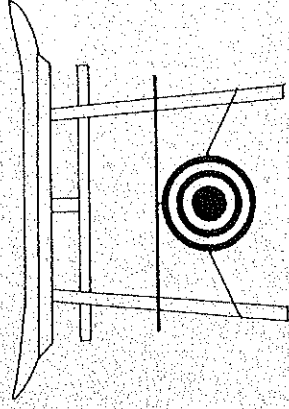
【カリガネの的】… (雁が音・雁金)

おおま<sup>ま</sup>大的を射終わると今度は、直経約一尺程の「カリガネの的」と呼ばれる<sup>しょうま</sup>小的を射るのである。この的には北に向かって飛ぶ<sup>かり</sup>雁を描いているところからこう呼ばれていると思われる。この鳥は悪鳥<sup>あくとり</sup>なので射殺さない内は止めることが出来ないため<sup>なんかい</sup>当たると、何回も繰り返して射られたとの事である。

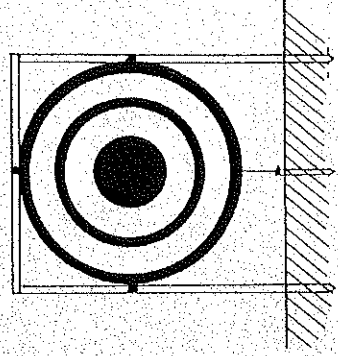
この的は小さく中々<sup>なかなか</sup>当たりにくい<sup>じめん</sup>地面をかすり乍ら<sup>なが</sup>でも的に当たれば「ずり当たり」と称して<sup>しょう</sup>当たった事にした<sup>せい</sup>そうである。

射終わって、お山大将<sup>おやまたいしやう</sup>から当日の射手<sup>しやしゆ</sup>に対して成績<sup>せいせき</sup>を書いた目録<sup>じゆ</sup>の授与<sup>じゆう</sup>があるが、この時には<sup>ほふくひざぎやう</sup>匍匐<sup>むぷく</sup>膝行<sup>ひざぎやう</sup>してこれを受け<sup>れい</sup>ることが礼とされている。

この<sup>しんじ</sup>神事が終わった後、<sup>しやうしん</sup>精進<sup>しやうしん</sup>上げをして<sup>かいさん</sup>解散<sup>かいさん</sup>する。



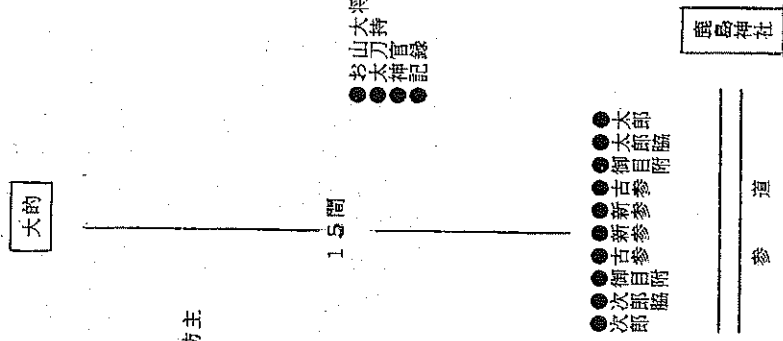
神の的



大的

● 大的

午前八時頃になるとお山大将を先頭に十人の射手が神前に一礼してこの鳥居の西の境内に入り左の図のように片腿<sup>かたまたま</sup>いだ姿で立って並ぶのである。



そ  
みねざき

## 【**岨峰崎とは何処の場所？**】 岨峰崎の場所を検証した。

…伊達輝宗がその奪還を図り伊具郡に出陣して戦った。  
矢ノ目の合戦はその中の一つである。伊具郡を勢力下に置いた相馬氏は本陣を金山城に置き、小斎城を前線基地とした。  
それに対し、伊具郡に出陣した伊達氏は矢ノ目に本陣を置き、小斎・丸森往還封鎖にかかると同時に**岨峰崎**より小斎城に取り付いて攻略にかかった。  
発端は小斎城の堀切普請から始まる。小斎の城は西の方から山伝いに登ってこられる地形なので、途中で粗根を掘切らなければ伊達勢を防ぎ止める事は難しいと言う事になった。 ………

『場所には陣場山 遊仙寺の法面（物見櫓）から美作明神・古館釜跡・金澤明神周辺まで一帯の峰の事と判明した』 ………

平成27年6月19日

## 【伊達政宗初陣の時 年齢は**15歳**か**16歳**か？それとも？】

…伊達市梁川の亀岡八幡に政宗初陣祈願の看板に記載されている。  
天正10年（1582）4月1日**16歳**になった政宗は父輝宗とともに梁川八幡に初陣の祈願を行い……相馬氏攻略のため阿武隈川を下り金津へと兵をすすめて行く4月26日金津を陥し入れ、ついで丸森城を……

作家 山岡荘八「伊達政宗」より

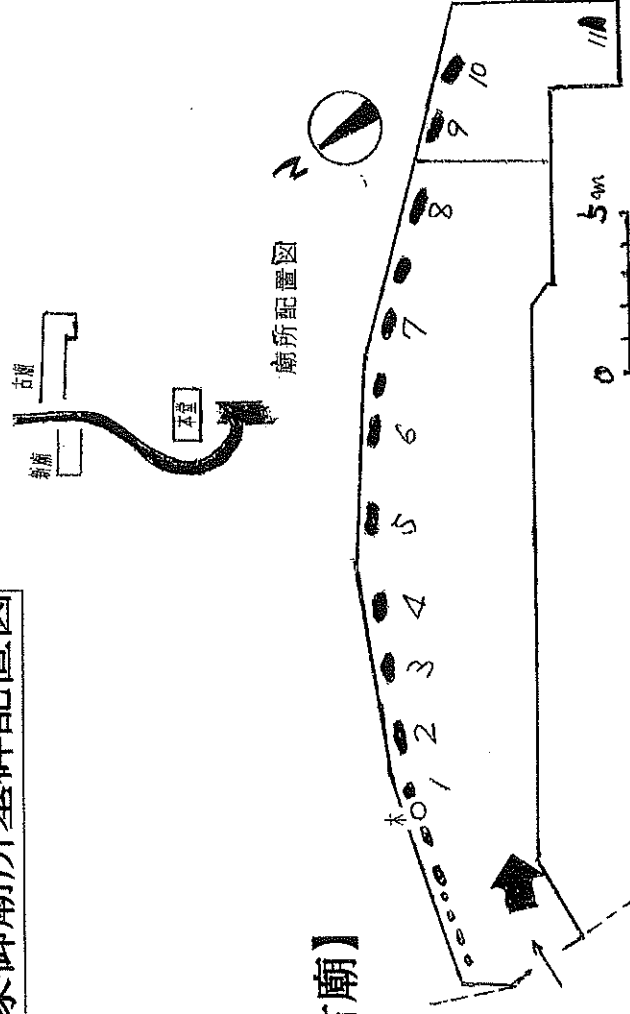
『丸森町郷土史年号』によると下記の通り記載されている。

永禄10年 （1567） 政宗米沢にうまれる。  
天正4年 7月（1576） 晴宗、輝宗父子 小斎を攻める。  
天正5年11月（1577） 政宗元服する。（11歳）  
天正9年 5月（1581） 政宗**15歳** 父輝宗に従い初めて伊具郡に出陣する。  
天正10年4月（1582） 輝宗、政宗父子、角田に陣し相馬義胤の軍を金津、  
新地、丸森、金山を攻める。  
天正11年 （1583） この年、輝宗、政宗父子、丸森・小斎・金山に攻める。  
天正12年 （1584） 和議ようやく整う。  
10月政宗、伊達家を継ぐ。米沢城主となる（18歳）

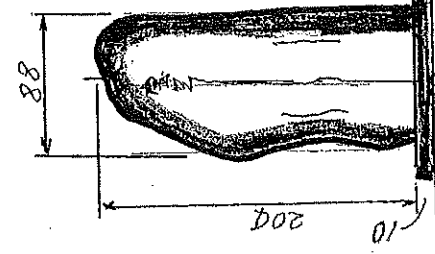
※引き続き検証を続けて行く年齢は「満の年齢」「数えの年齢」か「それとも」！

政宗の生年は永禄10年（1567）8月3日となっている。

# 佐藤家御廟所墓碑配置図



## 【古廟】



No.	諱	No.	諱
1	道信 ④	7	清信 ④
2	本信 ③	8	為信 ⑦
3	楯丸 ⑤	9	因信 ⑥
4	易信 ⑤	10	晴信 ⑥
5	信 ⑤	11	晴信 ⑥

初代 佐藤為信 NO. 2 本信  
たのぶ

(佐沼の清川の畑に埋葬された) ?

二代 佐藤勝信  
かつのぶ

(覚範寺) ?

三代 佐藤実信  
さねのぶ

(小斎・二の迫)

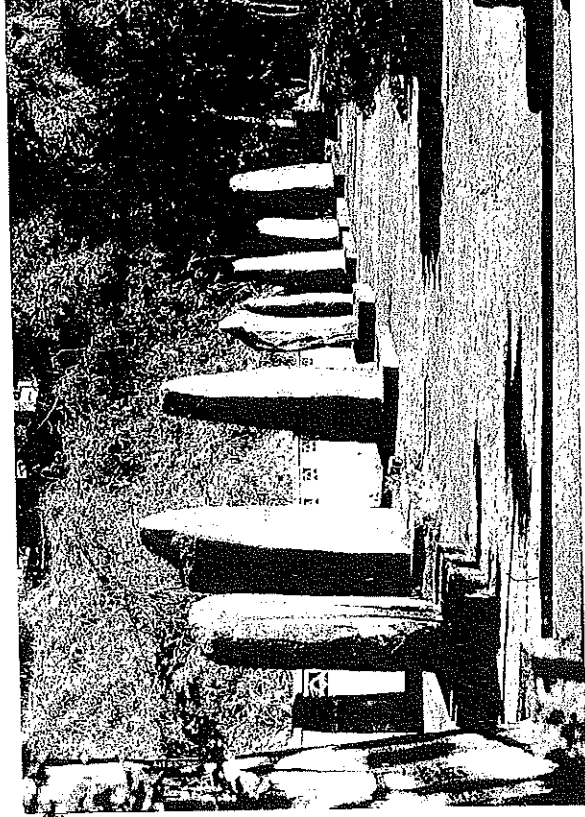
四代 佐藤清信  
きよのぶ

(遊仙寺)

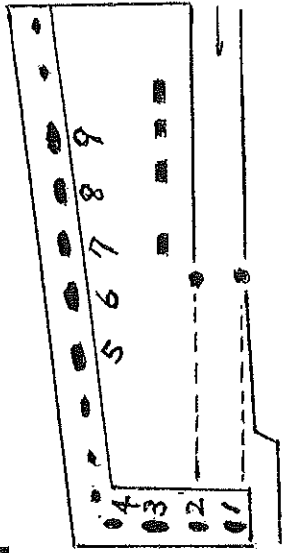
五代 佐藤易信  
やすのぶ

(遊仙寺)

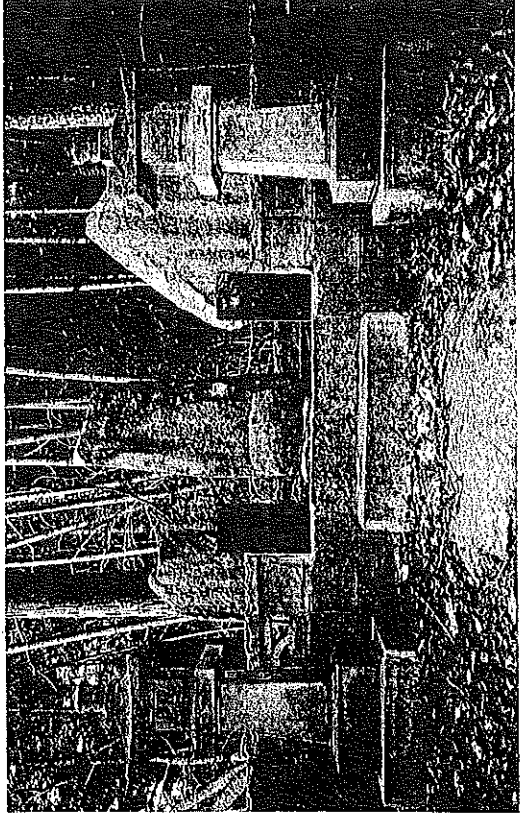
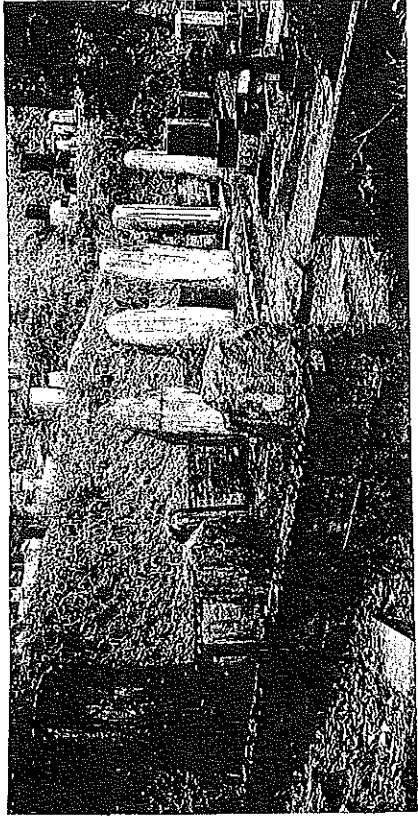
以下遊仙寺



【新廟】

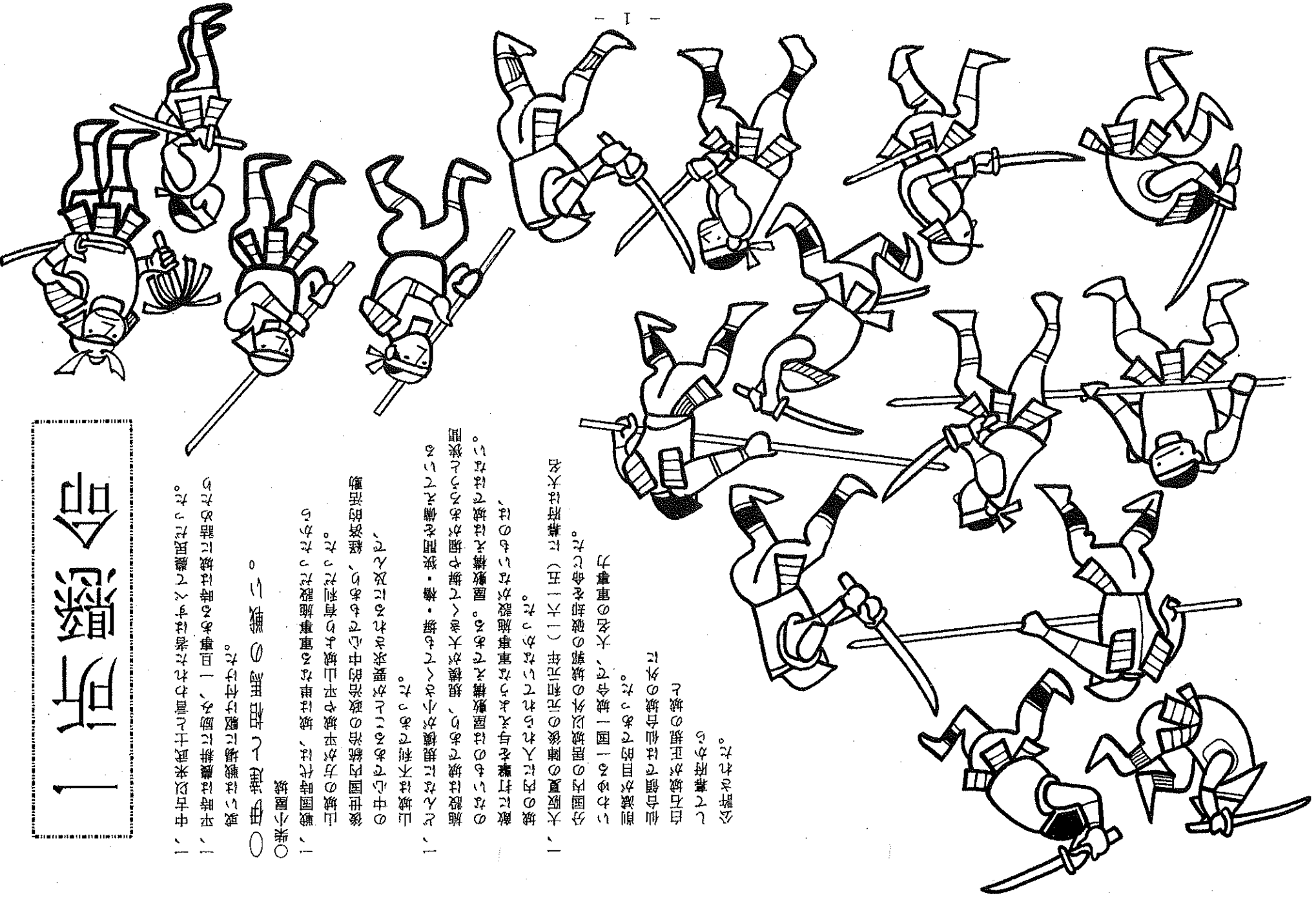


No.	諱
1	恒信 夫人
2	氏尊 夫人
3	氏尊 夫人
4	氏尊 夫人
5	氏尊 夫人
6	義春 夫人
7	義春 夫人
8	助信 夫人
9	助信 夫人



③ 実信夫妻の墓所 (小斉二の迫)  
中央が③実信、右側が同夫人

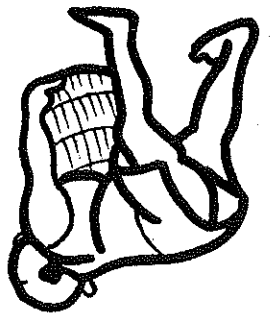




# 合 衆 台 一

此の合衆台は、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百。

此の合衆台は、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百。



ヲ三三三ヲ加田ナ …… 淵好庵魚  
 眞〇〇一… 寸治養婆  
 ナト〇〇扇田ノ… 寸治養婆ノ  
 寸治ノ養婆ハ御本藏ノ  
 (男ナゴ)

次編 馬は道草馬(引) 。うごかぬ馬(た)をさ(た)を來(上)・養(順)  
 應(和)・養(順)由・養(順)に才(難)へた(の)新(馬)ナ(レ)ル(理)頭(ノ)の(さ)母  
 ヲ并(養)上・養(順)應(和)・養(順)由・養(順)に(の)道(草)馬(引)由(昔三三養(順)  
 中(養)ノ・昔三〇一(養)國(應)和(和)ノ入(〇一)(養)國(由) 道(草)馬(引)由(は)道(草)馬(引)の(才)ナ(レ)  
 。（た)こ(り)田(染)を(尾)懸(の)上(馬)道(草)由(は)道(草)馬(引)の(才)ナ(レ)の(才)ナ(レ)の(才)ナ(レ)  
 才(養)引(に)セ(レ)。(た)ゞ(な)ら(ぬ)ウ(ハ)ウ(ハ)ウ(ハ)ナ(レ)ノ(中)總(に)頭(の)才(養)馬(引)に(才)ナ(レ)の(才)ナ(レ)  
 才(養)ノ(才)養(引)に(才)養(引)由(。(た)ゞ(な)ら(ぬ)ウ(ハ)ウ(ハ)ウ(ハ)ノ(上)馬(引)の(才)養(引)に(才)養(引)由(昔)

才(養)馬(引)に(才)養(引)由(昔三三養(順)



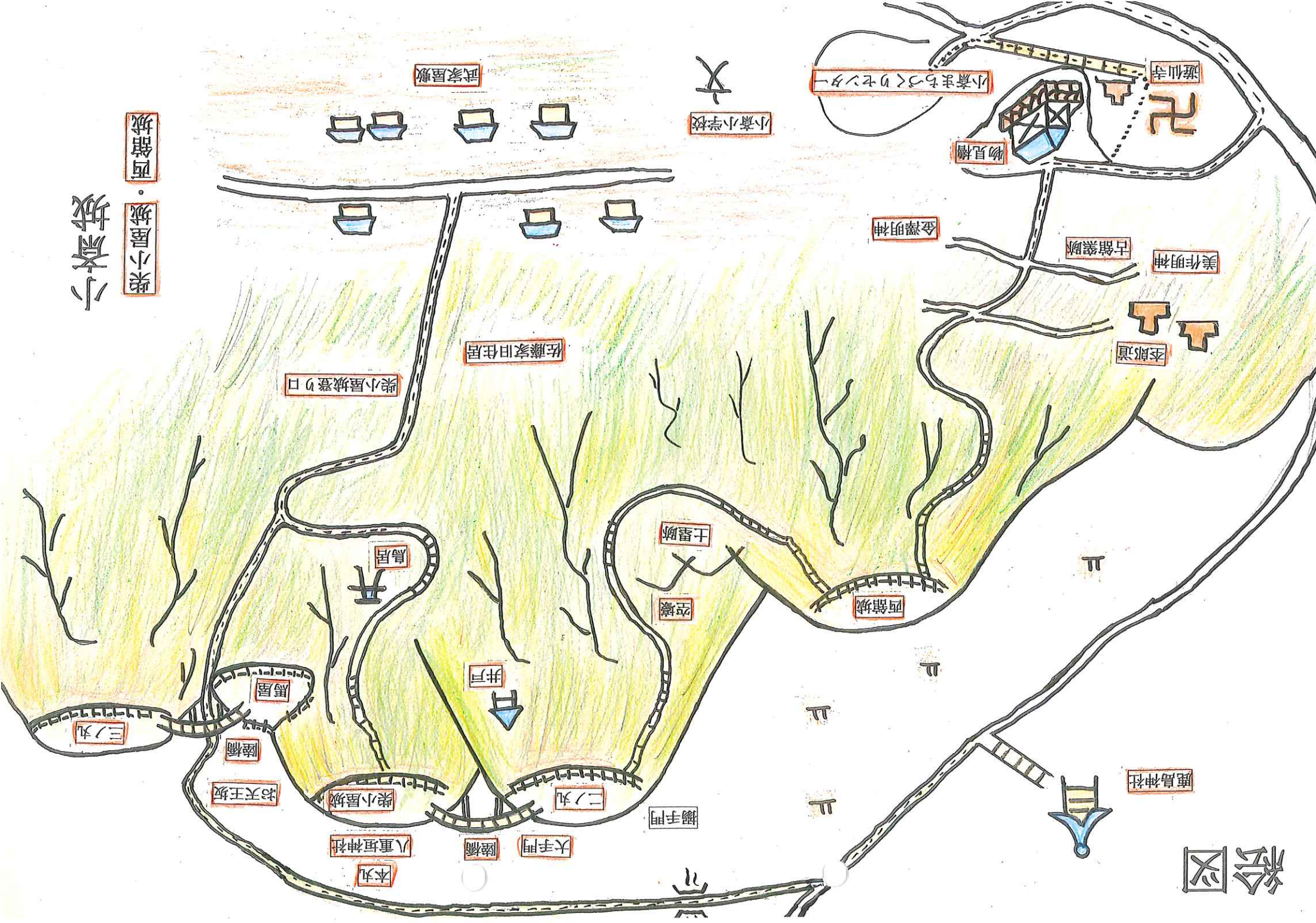
斎藤軍太美作明神 (陣場山遊歩道・金沢明神の北の山)・平成26年4月11日 (金) 齋藤良治先生に同行 撮影



金沢美濃が討死した場所に金沢明神として祭られている。金沢美濃は佐藤為信の縁者であったが為信の家臣、斎藤軍太美作 (みまさか) と為信によって討死した。天正9年4月11日



絵図



■ 柴小原城入口 分一 …… ↑ 総二 分三 間 柴小原城入口 分三 総二 柴小原城入口 分三 総二

分一 …… ↑

■ 柴小原城址登5口・佐藤家旧住居野

分一 …… ↑

■ 沼野(池)

分三 …… ↑ 沼野(池) 分三 …… ↑ 沼野(池) 分三 …… ↑

■ 沼野(池) 分三 …… ↑

分一 …… ↑

■ 本丸野(池) 分一 …… ↑

分一 …… ↑

■ 沼野(池) 分一 …… ↑

分一 …… ↑

■ 沼野(池) 分一 …… ↑

分一 …… ↑

■ 沼野(池) 分一 …… ↑

分一 …… ↑

■ 沼野(池) 分一 …… ↑

分一 …… ↑

■ 沼野(池) 分一 …… ↑

分一 …… ↑

■ 沼野(池) 分一 …… ↑

分一 …… ↑

■ 沼野(池) 分一 …… ↑

分一 …… ↑

■ 沼野(池) 分一 …… ↑

分一 …… ↑

■ 沼野(池) 分一 …… ↑

小崎城・遊歩道の所用時間(徒歩)と距離

小  
齊  
口  
碑  
之  
無  
鄉

無  
石

無  
下  
戶

無  
百  
姓

